

## 俳諧は屁のようなもの

川名将義

レコード大賞の新人賞と大賞をダブルで獲得した歌手は、都はるみと細川たかしぐらいだが、俳人協会の新人賞と協会賞をダブルで獲得した俳人も、中原道夫と黒田杏子ぐらいで、とても希少なのである。今回はその中原道夫の滑稽句を垣間見てみようと思う。

### 白魚のさかなたること略しけり

言われて見れば、鱗もない尾鰭も鰓もあるんだか、ないんだか解らないような白魚。魚と言うのだからさかななんだろうが、その風体を「略しけり」と言いおおせたところが、なんとも滑稽ではないだろうか。

### 風呂吹に舌一枚の困るなり

熱々の風呂吹き大根にがぶりと噛みついたとたん、その芯の熱さに舌をしたたかに火傷してしまった。ああ、こんな時に二枚舌が使えたらどんなにか助かったろうに。そう二枚舌を持たない善良な市民は、かくて一枚舌を嘆くのである。

### 颱風の目についてをりぬ豫報官

気象予報士が「この颱風は中心の目がこのようにはっきりした、強い勢力を持って

います」などと言いつつ、気象衛星が撮った颱風の画像の目を棒で突ついている。一つしかない目がそれじゃ痛かろうに… テレビの気象番組などでよく見かける光景を、なんとも滑稽に活写し、かつ哀れんでいるのである。

#### 絨毯は空を飛ばねど妻を乗す

アラビアンナイトでは、絨毯が空を飛んだが、現実には、今や中年太りの妻が、どっしりと絨毯の上に坐っている。深読みをすれば、作者は内心では若い娘を絨毯に乗せて、どこかへ飛んで行ってしまいたいなんて、不謹慎に思っているのかも知れない。諦観のような願望のようなどころまで見えないであろうか？

#### 飛込の途中たましひ遅れけり

人はそれぞれに魂魄を持っていると思われる。例えば痛飲の好きなたましいは、その人をアルコール依存症に駆りたてるし、くすりに頼るたましいを持った女優が話題になったりもする。この句、高飛び込みかバンジージャンプか解らないが、高所から一気に飛び込んで、水面に身体が到達する途中に、そのスピードに着いて行けないたましいが、身体の中で遅れをとると言っている。こんなとぼけた滑稽句を考えつく頭脳は、どんな組み立てになっているのだろうか。途中という措辞が実に決まっている。

#### 俳諧は屁のやうなもの浮いてこい

俳諧なんて言うのは、取るに足らないもの。すなわち所詮屁のやうなものなのだ。

---

そうピシヤリと言い切っているこの句には、思わず呵呵大笑してしまう。俳句はすなわち夏炉冬扇の類いのものである。だがそう自分でも失笑しながら、実際は飽きることなく、夢中で俳諧を極めようとしているのである。その自笑自虐がこの句を滑稽の極みと思わせるところである。